REPORT 全国植樹祭 天皇皇后両陛下行幸啓

本年5月22日に第62回全国植樹祭が新庄総合公園を主会場に開催されました。ご臨席いただいた天皇皇后両陛下には式典前と式典後に当館にお立ち寄りいただき、そして式典終了後のお立ち寄りの際には特別展「脇村義太郎と禮次郎　珠玉のコレクション」をご覧いただきました。去る平成11年に開催された南紀熊野体験博の際にも秋篠宮殿下と妃殿下に当館の展覧会をご覧いただきましたが、ご皇室の賓客をお迎えするのはそれ以来の栄誉ある出来事でした。

脇村家とご皇室には深いつながりがあり、脇村禮次郎氏ご令室の祐子様は美智子皇后陛下のご尊父、正田英三郎氏の妹であり、皇后陛下にとっては叔母にあたる方となります。そのため、今上陛下が皇太子の時代から脇村義太郎氏や禮次郎氏とは家族含めてのお付き合いがあったそうで、しばしば逗子や鎌倉にある両兄弟の自宅を訪れていたとのことです。そこで両兄弟が収集されていた絵画の多くをご覧になったことがあるようで、この度の展覧会のことを脇村家から皇后陛下にお伝えしたところ、とても楽しみにしている旨のお言葉をいただいたとお聞きしました。

両陛下行幸啓に際しての準備は大変である、という話を耳にはさんではいたものの、以前に秋篠宮殿下と妃殿下をお迎えした経験があるため、その時のことを基準に考えていたのですが、実際に計画が打診されてから式典当日までの間に県警や警察庁、関係部署の度重なる視察はほぼ2年間続き、行幸啓の3ヶ月前くらいからは何度もリハーサルが行われるなど、天皇皇后両陛下をお迎えすることの重大さは似て非なるものであることを改めて実感することとなりました。

こうして全国植樹祭当日となり、両陛下の行幸啓に臨むこととなりましたが、

特別展「脇村義太郎と禮次郎 珠玉のコレクション」を観賞される両陛下

この日は朝から雨模様で時折激しく降ることもあったため、式典の進行や行幸啓に支障がないか心配していました。ところが、両陛下が到着された頃にあわせるかのように雨はあがり、式典は滞りなく進行していきました。式典終了後、両陛下は再度当館に立寄られて短い時間ではありましたが禮次郎氏のご息女である健子様と義太郎氏のご子息である友雄様（写真右より2人目）のご説明を伴いながら、展覧会を楽しまれました。

（主任　辰巳　充）

田辺市立美術館へのきもち⑥

新庄総合公園で行なわれた全国植樹祭後、会場に隣接する田辺市立美術館の展示を天皇皇后両陛下にご高覧いただいた折に、その前半部分（第1·2室）をご説明させていただきました。

美術館の学芸員の方との事前の打ち合わせでは、第1室は青木木米《聴濤図》、第2室では母脇村祐子の書のご説明をさせていただくことになっていました。井口館長のご先導で第1室にお入りになられた両陛下は、すぐに右側最初の作品、桑山玉洲《雪山唸客図》の前にお立ちになられましたので、江戸時代における和歌山出身の三大文人画家の一人であること、玉洲芸術の最高傑作であることをお話させて頂くと、天皇陛下からは「和歌山のどこですか。」とのご質問がありました。すぐ隣の野呂介石《紅玉芙蓉峰図》もご覧になられましたので、介石も三大文人画家の一人であること、「赤富士」とも言われ介石の代表作品で、他館への貸し出し依頼も多い人気の作品であるとご説明させていただきました。天皇陛下は「この赤富士の景色は朝ですか、夕方ですか。」とのご質問があり、また有名な浮世絵の「赤富士」のことも話題にされ、本当にご熱心にご覧いただきました。三番目にやっと青木木米の作品になり、この作品は木米59歳の作品で、「聴濤」とは"波濤を聴くこと"ではなく、"松風の音を聴く"と解釈されていること、昭和60年にロサンゼルス、カウンティ美術館の「近世水墨画展」に出品していることなどをお話させていただきました。皇后様からは「木米は焼き物で有名だと思っていました。水墨画も描いていたのですね。」とおっしゃっていただきました。その後壁面のガラスケース内の作者不詳《洛中洛外図屏風》の前にお立ちになられましたので、この屏風は以前故司馬遼太郎氏が所蔵していたこと、女御御所やその他の景観から江戸時代の寛永年間に制作されたものと推定されていることなどをご説明させていただくと、右から左へとご熱心にご覧下さり、左端の五重塔を指されて「これはどこですか。」とお聞きになられました。この時点で前半2室の制限時間の大半を使ってしまい、井口館長はもう第2室への廊下に入っていかれて、ご心配そうな表情をされたのですが、皇后様はお一人で屏風と反対側に展示されていた祇園南海《唐金梅所宛書状》のところに行かれて、「書状の表装に施された刺繍も素晴らしいですね。」とご覧いただきましたので、天皇陛下もお側に近づいていかれました。そこで、南海が三大文人画家の一人で文人画家の草分けであること、池大雅にも影響を与えたことなどを、横の池大雅の作品をご覧いただきながらご説明させていただきました。第2室への廊下には義太郎と禮次郎の若い頃の写真を飾っていただきましたが、皇后様は、「懐かしいわ。」とおっしゃってくださいました。この時点でもう時間は残っていません。焦りましたが、両陛下はゆっくりと第2室を歩まれていかれましたので、私も立ち止まらずに高橋草坪·田能村竹田·玉村方久斗の名前をあげて簡単にお話させていただき、最後に母の書《花》をご覧いただきました。この後、第3·4室では脇村友雄が佐伯祐三《リュクサンブール公園》、朝井閑右衛門《脇村義太郎先生像》などについてご説明させていただきました。

両陛下がお帰りのとき、エントランスホールでお見送りさせていただいていますと、皇后様より「おじさまがた、田辺市によいことをなさいましたね。」とのお言葉を賜りました。

両陛下の田辺市立美術館ご視察につきましては、多くの方々が熱心に準備に関わられました。特に井口富夫館長、辰巳充主任（学芸員）、三谷渉学芸員はじめ館員の皆様、田辺市の職員の皆様には厚くお礼申し上げたいと思います。有難うございました。

（脇村奨学会　学芸員　白井　健子）

脇村祐子　書《花》

田辺市立美術館NEWS ORANGE Vol.15

編集・発行：田辺市立美術館／熊野古道なかへち美術館

発行年月日：平成23年10月1日

田辺市立美術館

〒646-0015　和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770　FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館

〒646-1402　和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390　FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

編集後記

5月に行われた全国植樹祭の式典前後、天皇皇后両陛下にご休憩所となった当館にお立ち寄りいただきました。私もスタッフの一員として、準備から当日まで慌しく過ごしましたが、大変貴重な経験となりました。

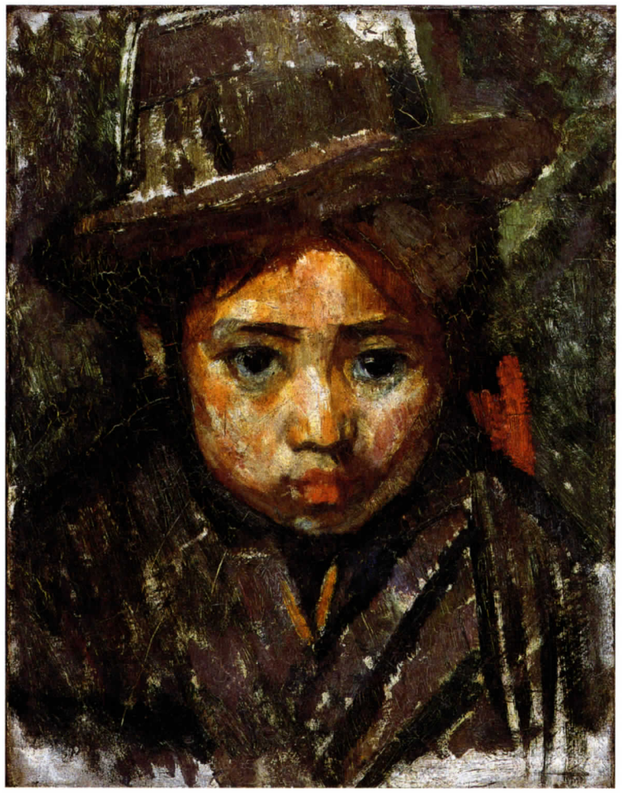
今年は11月1日に田辺市立美術館の開館15周年を迎える年でもあります。慶事が続いてお伝えしたい内容がますます増え、前号で「紙面が足りない!」と書きましたが、今号はとうとう付録を付けることになりました。

今後も、一層多くの方に当館の活動を知っていただけるよう努めたいと思います。

（本館M.M.）

ORANGE

田辺市立美術館NEWS
Vol.15



中村　彝《帽子を被る少女》　1912（明治45）年

作品紹介　中村　彝《帽子を被る少女》　田辺市立美術館蔵

1901（明治34）年に創業したパン屋中村屋は、1909（明治42）年に現在の新宿本店の地に移転している。創業者の相馬愛蔵と、同郷（長野県安曇野市）の後輩である彫刻家荻原守衛（碌山）との親交から、当時の中村屋は様々な文化人が交流するサロンともなっていた。

そこに出入りする芸術家の中の一人に中村彝（1887～1924）もいた。中村は1911（明治44）年の暮れから三年間、荻原、柳敬助が使った中村屋裏のアトリエで生活している。相馬家の家族の一員のように迎え入れられながらも、やがて精神的な葛藤が生じ、肉体的にも肺病による喀血が始まるなど、中村の短い生涯の中でも、この間は特に苦悩の多い時期だったように思われる。しかし制作の上では、オーギュスト·ルノワールへの傾倒から得た生命感を表出する中村の特徴的な表現が、相馬家の長女俊子を描く一連の作品へと結びつき、画家としての一層高い評価を得た時期でもある。

《帽子を被る少女》もこの中村屋滞在期の作品だが、描かれているのは俊子ではなく、次女の千香である。未完の作品のようにも思えるが、中心をなすあどけない少女の表情には、その内面までもがしっかりと映し出されており、中村の優れた肖像表現の特質が際立ってうかがえる作品の一つとなっている。

（学芸員　三谷　渉）

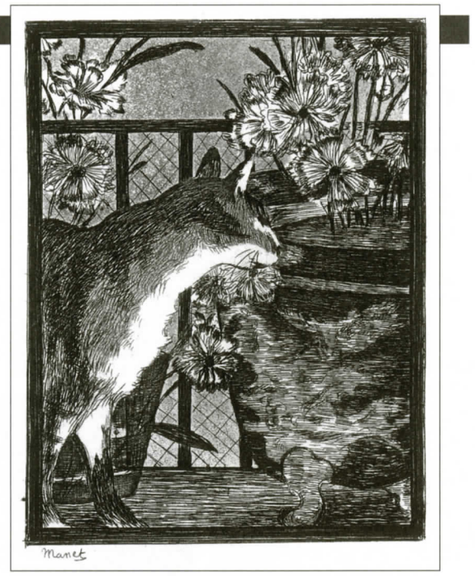
印象派と版画

伝統的な主題や技法にとらわれず、自身の視覚体験を重視して選んだ風景や、近代化のなかで急激に様変わりする都市の生活や光景を、未完成とも受け取られかねない素早い筆致と混色を避けた明るい色彩で描いて油彩画の表現を革新した、後に「印象派」と呼ばれることになる画家たちの活動の端緒は、1874年にパリで「画家・版画家・彫刻家などの合資会社」を名乗って展覧会を開いたことでした。またその制作には日本の多色木版画浮世絵からの影響が少なからずあるなど、印象派の画家たちは当初から版画に強い関心を寄せていたことがうかがえます。

19世紀のヨーロッパ、とりわけフランスでは、産業革命以降の機械化によって版画の制作が大きく変化すると、手作業による版画の制作は、複製画や挿絵の制作のための技術としてではなく、画家の個性を反映する芸術的な表現の可能な手段として見直されるようになりました。ジャン=バティスト=カミーユ・コローやエドゥアール・マネらも参加した1862年の「腐蝕銅版画協会」の設立を契機にしてさまざまに版画の伝統が刷新され、カラーリトグラフのような新しい技法も開発されるなど、版画芸術はかつてない隆盛を迎えます。

顧みられることが少ないのですが、そのような時代のなかで印象派の画家たちの多くもまた、版画制作に取り組んで独創性を発露し、新たな発想、技術で幾多の作品を残して、その表現を一層豊かなものとしています。今なお新鮮な感動を与えてくれる19世紀後半から20世紀初頭にかけて花開いたフランスの版画芸術を国内外の個人コレクション約130点によって紹介する展覧会をこの秋に開催します。

（学芸員　三谷　渉）



E. マネ《猫と花》1869年／エッチング，アクアチント

★特別展「版画に見る印象派　陽のあたる午後、天使の指がそっと」

会　場／田辺市立美術館
会　期／2011年10月15日（土）～11月20日（日）
休館日／毎週月曜日・11月4日（金）
観覧料／600円（480円）
学生及び18歳未満は無料　※（　）内は20名以上の団体料金です。

■記念講演会を開催します。

11月12日（土）午後2時より　田辺市立美術館研修室
「印象派の版画とイメージの自在な操作」
大森達次（美術史家・女子美術大学名誉教授）
観覧料のみ必要、手話通訳もつきます。

展覧会紹介

上村松篁《樹蔭》　1948（昭和23）年　　松伯美術館蔵

★特別展　生誕110年記念　上村松篁展

会場 田辺市立美術館
会期 2012年2月11日（土・祝）～3月25日（日）

田辺市立美術館では戦後の新しい日本画の表現を拓いた画家に注目した展覧会を継続して開催してきています。田辺市出身の稗田一穂（1920～　）の制作を紹介する展覧会に始まり、2007（平成19）年にはその稗田が主な作品の発表の場とし、戦後の日本画の革新を導いてきた「創画会」の60年を回顧する特別展を開催しました。次いで2009（平成21）年に稗田の師であり、創画会の活動を牽引した巨匠、山本丘人（1900～1986）の画業を振り返る展覧会を開催しましたが、今回は丘人とともに戦後間もなくに「創造美術」（創画会の前身）を結成して新しい日本絵画の確立を目指し、1984（昭和59）年に文化勲章を受章したもう一人の巨匠、上村松篁（1902～2001）の生誕110年を記念した展覧会を開催します。

花鳥画の表現に現代の息吹を与え、類まれな画格高い作品を残した松篁の芸術を「初期」「転換期」「古典回帰」「晩年」の4章で構成する展覧会によって紹介します。

（学芸員　三谷　渉）

なかへちで出会うアート

★森の中のカメラ・オブスキュラ

熊野古道なかへち美術館のある近露は、古くより熊野三山に向かう人々で賑わった宿場町でした。箸折峠から見下ろす近露の美しい景色に、かつて古道を歩いてきた人々は感動し、歌にも詠みました。昨年夏、町を挟んで向かい側の山の中腹にもうひとつ近露の景色を楽しめるスポットが出現しています。木々の間に浮かんだように建てられたツリーハウスがその新名勝です。アーティストの佐藤時啓さんがボランティアの人たちと一緒に制作したもので、暗室になった内部の壁に、小さなレンズを通して風景が上下反転した形に映し出されます。ピンホールカメラの中に入ったような楽しい体験をして、新しい近露の風景をご覧になりませんか。

（学芸員　山本　泰代）

佐藤時啓《森の中のカメラ・オブスキュラ》2010年制作

REPORT 「原勝四郎展」記念講演会

【日時】3月5日（土）14:00～15:30　【場所】田辺市立美術館　研修室

今年の2月から3月にかけて開催した、原勝四郎（1886～1964）の画業を振り返る特別展の会期中に、詩人の河津聖恵さんにお越しいただいて「原勝四郎が放ち続ける詩の光」と題した講演をしていただきました。河津さんは京都にお住まいですが、2007年から紀州・熊野を旅し、その体験による詩作を継続されています。その中で出会った原の作品と、その触発による自身の詩作への影響や、原の生涯と作品が投げかける今日の社会や芸術への問いかけについてなど、河津さんのこの画家についての深い思索がうかがわれる充実した内容でした。原の芸術が現代の私達に放つ、まさに「詩の光」について語っていただくことができました。

（河津さんの一連の詩は『新鹿』／思潮社／2009年、『龍神』／思潮社／2010年、の二つの詩集に編まれて刊行されています。『新鹿』の装丁には原の《江津良の海》の図版が用いられています。）

（学芸員　三谷　渉）

講演会の最後には自作の詩の朗読もしていただきました（フルートで伴奏しているのは当館の某）

REPORT 花と子どものフェスティバルに協賛しました

【日時】5月4日（水・祝）・5日（木・祝）10:00～17:00　【場所】新庄総合公園

昨年秋のコスモスまつりに続いて、ゴールデンウィークに行われたNPO花つぼみ主催の花と子どものフェスティバルに協賛し、会場の一角をお借りして開催中の展覧会（脇村義太郎と禮次郎珠玉のコレクション）の期間限定招待券を配布しました。

今回は招待券の配布だけでなく、館蔵作品の絵はがきやアートファイル等の販売も行い、多くの方が足を止めてくださいました。前回よりも多くの方がご来館してくださり、当館のコレクションにも随分と関心を寄せていただけたようでした。

これからも、積極的に当館の活動をアピールできる機会を作りたいと思います。

（事務員　松原　麻衣）

大勢の方に関心を寄せていただきました

REPORT 「熊野の元気」ワークショップ

とべ！ヤタガラス【日時】7月23日（土）13:30～16:00【場所】熊野古道なかへち美術館
これも版画!?【日時】8月21日（日）13:30～16:00【場所】熊野古道なかへち美術館　近野林業会館

「熊野の元気」では3人のアーティストによる版画、木彫、絵本原画、アクリル画、布や網を使った造形作品などを紹介し、これにあわせて二つのワークショップを開催しました。

「とべ！ヤタガラス」ではアーティストの達哉ムチャチョさん、澤裕美さんにご指導頂いて、長い布の上にヤタガラスをモチーフにした絵を描き、旗を作りました。ひとりが分担するのは年齢に関わらず45cm×1mのスペース。ここへ思い思いの「ヤタガラス」が次々と描かれ、約7m幅の旗が計4枚完成しました。作業の場となった美術館の前庭から、皆で作品を高く掲げて裏庭まで大移動するのはユニークな光景で、あわててカメラを構える人も出ました。炎天下での作業でしたが、最後に木々の間にロープで繋がれ、風に翻る旗を仰ぐ皆さんは、満面の笑顔でした。

一方「これも版画!?」では番留京子さんのご指導のもと、プラスチックの下敷きに鉄筆やキリなどで絵を描いて、シンプルで味わいのある版画を作りました。紙に描くのとは勝手が違い、下敷きと格闘している参加者の姿は真剣そのもの。絵の具で彩色後は、いよいよ番留さんが実際に使用されているプレス機で印刷です。プレスされ、水を含んだ画用紙に写し取られた作品は、本当にどれもオリジナルで美しいものでした。身近な文房具と絵の具で、瑞々しい作品がうまれる面白さを学びましたが、同時に完成度の高い作品を思うように作ることの難しさも体験した作業でした。

両ワークショップには入れ代わり見学して下さる方がみえ、側で笑ったり感心したり。賑わいの中で大いに楽しんだワークショップとなりました。

（学芸員　山本　泰代）

澤裕美さんと語らいながらヤタガラスを描く参加者

刷り上がった作品を見ながら番留京子さんと話し合う小学生

REPORT 「現代のクレパス画」展ワークショップ

こどものためのクレパス画教室　【日時】8月20日（土）10:30～12:00/13:30～15:00　【場所】田辺市立美術館　研修室

清水靖子さんの指導を受けながらクレパスで色面の構成に取り組んでいます

「現代のクレパス画」展の会期中、クレパス表現の魅力を実際にクレパスを使ってみることでも感じてもらおうと、サクラアートミュージアムの清水靖子さんを講師に招いて2回のワークショップを開きました。

夏休み期間中の8月20日には小学生を対象とした「こどものためのクレパス画教室」を行いました。50色のクレパスセットが一人ひとりに配られ、色名を覚えながら指定された色を塗ってカラーチャートを完成させる作業をした後、画用紙を50マスに分割し、50色すべてを使って色面を自由に構成することを試みました。

クレパス特有の発色と扱える色の多さに喜びながら、こども達は一心に取り組んでいました。その間に講師の清水さんはクレパスの基本的な扱いを指導してまわり、時には保護者の方々に画材の特質や色名の由来なども解説されていました。展覧会とともにこの体験が良い思い出として長く記憶に残ってくれればと思います。

（9月17日には中学生以上を対象とした「大人のためのクレパス画教室」も開催しました。その様子はまた次号でご報告したいと思います。）

（学芸員　三谷　渉）